

鯨 研 通 信



第472号

2016年12月

一般財団法人 日本鯨類研究所 〒104-0055 東京都中央区豊海町4番5号 豊海振興ビル5F
 電話 03(3536) 6521(代表) ファックス 03(3536) 6522 E-mail:webmaster@icrwhale.org HOMEPAGE http://www.icrwhale.org

◇ 目次 ◇

国際捕鯨委員会／科学小委員会の変遷と日本との関係 (VII)	
IWC/SC への日本の対応組織の変遷……………	大隅 清治 1
現代ノルウェーの捕鯨 (3) - 監視制度と鯨肉流通、そして鯨を捕る人々 - ……	石川 創 5
日本鯨類研究所関連トピックス (2016年9月～2016年11月) ……	17
日本鯨類研究所関連出版物等 (2016年9月～2016年11月) ……	21
京きな魚 (編集後記) ……	22

国際捕鯨委員会 / 科学小委員会の変遷と日本との関係 (VII) IWC/SC への日本の対応組織の変遷

大隅 清治 (日本鯨類研究所・名誉顧問)

まえがき

本シリーズのII (大隅、2013) 号で紹介したように、日本は国際捕鯨委員会 (IWC) が設立されて4年後の1951年に国際捕鯨取締条約 (ICRW) に加盟が許された。そこで日本は、その決定の以前から、その準備段階として、IWCへの対応方策が国内で検討され、1951年の第3回IWC総会の前に「捕鯨対策委員会」が結成された。そして、その下部組織として、科学小委員会 (SC) と技術委員会 (TC) への対応を準備するための「専門委員会」が設置された。これがIWCの中で1960年以後、次第に重要性が増してきたSCへの対応を専門にする、「捕鯨対策委員会・資源部会」、「鯨類資源月例研究会」を経て、今日の「鯨類資源研究会」へと発展してきた。

本号では、その間のSC対応のための国内組織の変遷について、関連会合を含めて、紹介したい。

捕鯨対策委員会の結成

日本は1951年4月21日に、まだ連合国軍の占領下でありながら、ICRWに加盟を許された。そして、この条約の執行機関である、IWC会議への対策と準備のために、事前の4月18日に、水産庁から、水産庁次長、遠洋漁業課長、研究部調査課長、捕鯨担当官、外務省から、特別資料課事務官、経済1課技官、

捕鯨関係会社代表、南氷洋船団長、日本捕鯨協会長と主事が出席し、「捕鯨対策委員会」の設立に関する件を審議した。次いで、この設立準備委員会は、4月25日に会合を持って、捕鯨対策委員会の発会に備えた。かくして、1951年5月2日に発会式が執り行われて、捕鯨対策委員会が発足した。

捕鯨対策委員会は、本委員会の下部組織として、「専門委員会」と「事務局」が置かれた。専門委員会には、1) 南氷洋部会、2) 近海部会、3) 総合部会、が設置された。1)は南極海母船式捕鯨、2)は日本沿岸の大型捕鯨と小型捕鯨、の問題をそれぞれ担当し、3)は各部会の連絡・調整と、海区に直接関係しない事項を担当することとした。専門委員会はIWCの下部組織である、SCとTCの対策を兼ねて対応する、科学者、技術者、行政官からなる組織であり、その上部組織としての本委員会は、IWCの総会と財政運営小委員会(F&A)に対応した。

本シリーズのII号で、筆者は「捕鯨船舶装備改善委員会」を捕鯨対策委員会の下部組織として紹介したが、これは誤りであり、ここで訂正して、お詫びする。この委員会は、捕鯨対策委員会が設立される以前の、第二次大戦直後、日本の捕鯨が復興して間もなく、戦争によって疲弊した捕鯨船舶の装備を改善するために官民一体となって組織されたので、捕鯨対策委員会とは別組織であった。そして、この改善委員会は、電気銚、平頭銚、ラジオブイ、鯨探機、標識銚、などを研究開発して、日本の捕鯨技術の近代化に多くの業績を残した。

ところで、捕鯨対策委員会の事務局は、日本の捕鯨業界の団体である「日本捕鯨協会」が担当し、委員会の運営経費は、日本水産株式会社、大洋漁業株式会社、極洋捕鯨株式会社、日本近海捕鯨株式会社、日東捕鯨株式会社の母船式捕鯨、大型(沿岸)捕鯨を営む会社と、小型捕鯨協会が分担した。

水産庁研究課長の太田秀雄博士が専門委員会の議長に就任するとともに、彼は本委員会のメンバーでもあった。鯨類研究所の西脇昌治博士は専門委員会の委員として参加した。しかし、彼は本委員会には参加しなかった。

捕鯨対策委員会・専門委員会の変遷

捕鯨対策委員会・専門委員会は毎月1度の頻度で会議を持ち、上部組織の本委員会に結果を報告する。本委員会はIWC年次会議の前に数回会合し、専門委員会からの報告を受け、IWC事務局から送られるその年の議題案に沿って、日本としての対策を協議し、日本代表団を結成して、IWCの会議に臨んだ。

このような組織の下で、日本のIWC対応が暫くの間進められたが、1960年代に入って、鯨類資源の悪化が顕在化し、IWCによって、南極海と北太平洋における母船式捕鯨の規制が厳しさを増すと共に、政府はそれまでの日本の捕鯨の復興、発展から、捕鯨の縮小に対応しなければならなくなった。

そのような情勢に対処するために、水産庁と外務省の行政官だけから構成する、第1回「捕鯨対策会議」が、1964年7月15日に開催され、捕鯨対策委員会はこれ以後大きく変質した。しかし、IWC総会対応については本シリーズの主題でないので、捕鯨対策委員会・本委員会のその後の経過についての記述は、差し控えたい。

鯨研談話会

戦後の捕鯨の復興とともに計画された、国立の鯨類資源調査研究機関の設立が不成功に終わって、大洋漁業、日本水産、極洋捕鯨の各社をスポンサーとする、財団法人・鯨類研究所が大洋漁業の「中部科学研究所」を母体として、1947年に創立された。

その後間もなく、クジラの生物学の調査研究に携わっている若手研究者の間で、クジラについての研究ゼミナールのような集まりを持ちたいとの機運が醸成されてきた。そして、1954年に大村秀雄博士が鯨類研究所の所長に就任されたのを機会に、捕鯨対策委員会とは独立に、「鯨研談話会」の設立が具体的に計画された。

しかし、この組織は、捕鯨対策委員会・専門部会の中の、SC対応部門としても役立った。筆者はこの集まりがIWC/SC対応の実質的萌芽となって、「捕鯨対策委員会・専門部会」、「捕鯨対策委員会・資源部会」、「鯨類資源月例研究会」を経て、現在の「鯨類資源研究会」にまで発展していると考えられる。

この会では、クジラの生物学に関連して、幅広い角度からの研鑽を目的とし、外国の諸論文の紹介と検討、発表準備段階での研究の部内討論、クジラに関する知識の交換、を内容とした。

メンバーは、水産庁、東海区水産研究所、各捕鯨会社、日本捕鯨協会、東京大学（農学部、医学部）、東京水産大学（現東京海洋大学）、日本大学（水産学科）、国立・科学博物館、鯨類研究所（鯨研）の有志職員とし、事務局は鯨研が担当し、2～4ヶ月毎に会合を持つ、などが合意され、1955年2月19日に、「鯨研談話会」の第1回会合が実現した（木村、1955）。

この会の記念すべき第1回会合には、水産庁、日本捕鯨協会、極洋捕鯨、東京大学、東京水産大学、鯨研から14人が参加し、東大医学部の小川鼎三教授による「1865年10月、スエーデン西海岸における白長須生け捕り記」、鯨研の大村秀雄所長による「日本近海の植鯨とアカボウ鯨」の2題の講演を頂き、参加者が討論した（木村、1955）。

「鯨研談話会」はその後、1967年までに31回の会合を持ち、毎回2、3題の話題提供を中心にして、14～40人の出席者によって討議がなされ、それぞれの会合の殆どの短報が、「鯨研通信」44号から194号までに記載されているので、興味ある方は、調べられたい。

IWCを巡る捕鯨の国際情勢は、この間に次第に厳しさを増し、その情勢に対応するために、1966年には水産庁・東海区水産研究所数理統計部と資源部第3研究室（オットセイ資源）に鯨類研究所の所員3名（大隅、奈須、市原）が異動し（大隅、1991）、次いで東大・海洋研究所にも3名（西脇、根本、粕谷）の所員が異動し、さらに藤野所員は米国の水産研究所に移籍して、鯨類研究所は組織の大幅な縮小を余儀なくされた。

しかし、「鯨研談話会」は、1987年に「鯨類研究所」から「日本鯨類研究所」に組織変えしても、継続した。同研究所は最近では、外国等から研究者が来訪した際などに、不定期的に、この種の会合が開催されている。

日本鯨類研究所では、この他に、1987年10月に田中昌一博士の理事への就任とともに、所内に「資源管理研究所」を並立し、「水産資源管理談話会」を主催したが、この談話会は「鯨類資源月例研究会」と関係するが、それとは独立であり、2001年1月の36回会合をもって終了した（日本鯨類研究所年報）。

捕鯨対策委員会・資源部会

先に紹介したように、1960年代に入って、国際捕鯨情勢が厳しくなるに連れて、捕鯨業界がスポンサーとなっていた、従来の「財団法人・日本捕鯨協会鯨類研究所」では、この時代に対応するのが困難となった。

その時代に、各種の国際漁業の資源管理の強化のための資源調査研究を目的にする、「水産庁・遠洋水産研究所（現・国際水産資源研究所）」が1967年8月に清水市に設立された。そして、その中に鯨類研究部門とオットセイ研究部門が設けられることになり、その準備要員として、鯨類研究所の3名の所員が1966年5月に水産庁・東海区水産研究所に移った。最初大隅、奈須の2人は数理統計部に所属したが、同年8月に「資源部第6研究室」として、初めて水産庁の水産研究所に鯨類資源研究組織が独立し、大隅、奈須の他に正木康昭が内海区水産研究所から異動して加わった。そして、遠洋水産研究所の設立に伴って、この研究室は「底魚海獣資源部 鯨類資源研究室」に移行した。東海区水研の資源部第3研究室に所属した市原は、遠洋水産研究所の「底魚海獣資源部 おっとせい資源研究室」に移動した（大隅、1991）。

遠洋水産研究所の鯨類資源研究室の開設に伴い、IWC/SC 対応を目的とした「捕鯨対策委員会・資源部会」が1969年9月に発足した。部会のメンバーは、水産庁、遠洋水産研究所、鯨類研究所、東海区水産研究所、東京水産大学、東海大学、共同捕鯨株式会社、からの参加者であった。この会議は、鯨類研究所が事務局を担当し、原則各月に1度、東京または清水市で開催された。その会議の日付と場所は、遠洋水産研究所の機関誌「遠洋」に記録されているので、参照されたい。

鯨類資源月例研究会

「鯨類資源月例研究会」は、1987年10月31日付けで「(財)日本鯨類研究所」が発足したのに伴い、「捕鯨対策委員会・資源部会」の活動を引き継ぎ、同研究所の事業を促進するために、名称を衣替えした。この会は、鯨類に関する試験研究及び調査、並びに鯨類に関わる国際情勢に関する調査等を行う事により、水産資源の管理と利用の増進に寄与する事を目的として、設立された（日本鯨類研究所、1987）。

この研究会の検討項目は、

1. 鯨類の調査研究計画の立案
2. 鯨類の生物学的知見の発表と討論
3. 鯨類資源評価法の確立
4. 生物学的、工学的鯨類資源管理方式の検討
5. その他

であり、メンバーは東京大学、東京水産大学、統計数理研究所、遠洋水産研究所（現国際水産資源研究所）、東海区水産研究所、日本鯨類研究所、水産庁、日本捕鯨協会、必要に応じて統計会社、等で構成され、ほぼ毎月1回、原則として日本鯨類研究所の会議室において開催される事とした。

この会の第1回会合は1987年8月3日に霞山会館で開催され、27名が出席した。

毎回の研究会の報告は日本鯨類研究所年報に短報として報告されている。この会はそれ以後「月例会」と略称されて、言い習わされた。

鯨類資源研究会

「鯨類資源月例研究会」はさらに、1997度に組織名を「鯨類資源研究会」に変更した。しかし、この研究会の目的と検討事項は、鯨類資源月例研究会のそれらを踏襲した。また、会の構成員も従来と変更はなかった。

鯨類資源研究会は、その中に「IWC/SC 対策部会」を設置し、行政的色彩の強い案件並びに組織間の手

続きに関する案件等はこの部会で検討することになった。また、この部会は水産庁（行政及び研究所）並びに日本鯨類研究所と東京海洋大学の一部関係者で構成されることとした（日本鯨類研究所年報平成9年度、1997）。そして、国際司法裁判所の判決以後の2014年からは、外務省漁業室の職員も参加するようになっている。

この研究会は、IWC/SC年次会議終了後から次のIWC/SC年次会議までを、1年度とし、原則として、毎月1回会合を持っている。「鯨類資源研究会」は2016年末現在まで継続している。

引用文献

遠洋水産研究所. 1969. 遠洋. 2号.

鯨類研究所. 1955-1968. 鯨研通信 45-194.

木村清治. 1955. 鯨研談話会第1回会合記録. 鯨研通信 44. 12.

日本鯨類研究所. 1987. 財団法人日本鯨類研究所年報. 昭和62年度.

大隅清治. 1991. うたかたのクジラ研究の場. 月島・東海区水産研究所開設40周年記念特集号. 48-51.

大隅清治. 2013. 国際捕鯨委員会/科学小委員会の変遷と日本との関係(Ⅱ) 国際捕鯨取締条約の設立と日本の加盟. 鯨研通信 459. 1-9.

現代ノルウェーの捕鯨(3)

—監視制度と鯨肉流通、そして鯨を捕る人々—

公益財団法人下関海洋科学アカデミー
鯨類研究室 石川 創

豊穡の海とザトウクジラ

Kato号が探鯨を開始してから10分もしないうちにミンククジラの発見があった。船長・砲手のダグは、鯨の追尾（彼らの流儀でいえば「接近」）に入っているというのに、まったく慌てる様子もなく捕鯨砲のメンテナンスを始めている。16年前に同船に乗った時も似たような調子だったからあまり驚きはしなかったが、日本の捕鯨船では考えられない呑気さである。前述のように、彼らはトップマスト1名とアッパーブリッジ2名で、砲手と無線で連絡を取り合いながら探鯨や追尾を行う。探鯨は日本の捕鯨船のように四六時中双眼鏡を使うということはなく、ほとんど肉眼に頼っている。これはひとつには、船速が遅いためにたとえ双眼鏡で遠くの鯨を発見しても接近が難しいという理由があるようだが、そもそも操業海域に集まっている鯨の密度が高いために、いったん鯨の高密度海域に入ればさほど苦勞することなく鯨が見つかるためであろう。

ノルウェー式の追尾は、静かにそして長く続く。途中何度も個体を見失い、たとえ再発見をした場合でも、それが最初の発見と同じ個体なのかよくわからない場合すらある。16年前に乗船した時にすでに気づいていたのだが、彼らは追尾中の鯨を見失っても船の後方をほとんど見ることがない。このため筆者は（16年前と同じく）船が追尾を始めると一人で双眼鏡を使って左右後方を監視し、トップやアッパーが見失った鯨を見つけて知らせることに専念した。自分で言うのもなんだが、探鯨には少なからぬ経験があるおかげで、乗船中は Kato 号の捕獲に結構な貢献をしたつもりである。

それにしても、周辺海域の鯨の多さには驚かされた。集まって来ているのはミンククジラ（図1）だけではない。船の周囲にはしばしば大きな噴気が連続して上がり、そのほとんどがザトウクジラである（図2）。大きなザトウクジラは体も噴気も目立つので、ざっと見ただけではミンククジラとどちらが多くいるのかははっきりしないが、ザトウクジラの陰に隠れるように姿を見せるミンククジラを識別するには神経を使った（新参者の自分がザトウとミンクを間違えれば、乗組員たちに探鯨能力を信用されなくなるからでもある）。



図1. 操業海域であるベアー島の周辺に集まるミンククジラ。

ザトウクジラを掻き分けるようにしてミンククジラを探すノルウェー海のこの光景は、筆者が前職（日本鯨類研究所調査研究部）時代に見た南極海の状況を思い出させた。筆者は1989年から2011年までの間に、合計14回南極海の鯨類捕獲調査に参加したが、最初の頃は滅多に見なかったザトウクジラが、1990年代後半から年を追うごとに増えて来た。特に調査海域の西側にあたる南極海第IV区周辺では、最後の頃にはミンククジラよりザトウクジラの発見が上回るようになってしまい、捕獲対象だったミンククジラは、大陸に近い氷縁際にまるで追いつめられるように集まっていた。（Murase *et al.* 2014）南極海のザトウクジラの

資源量が増加していることは今や誰もが認める（IUCN 2008, Matsuoka *et al.* 2011, IWC 2016）ところだが、当時はIWCの科学委員会にザトウクジラの増加を何度報告しても、日本の調査結果を認めたがらない反捕鯨国の科学者たちになかなか信用してもらえなかったものだ（松岡 2009）。

前回乗船した際に Kato 号が操業したノルウェー南部の北海では、ミンククジラは数多くいたがザトウクジラの姿を見ることはなかった。北大西洋のザトウクジラの夏期における索餌海域は、北米東部のメイン湾、



図2. ベアー島海域に集まるザトウクジラの群れ。ミンククジラよりこちらの方がはるかに目立った。

セントローレンス湾、ニューファンドランド・ラブラドルと、グリーンランド西部、アイスランド、そして今回操業海域のノルウェー北部の6か所とされており（IUCN 2008）、南部の北海と異なりノルウェー北部はザトウクジラとミンククジラが餌を競合する海域なのである。北大西洋におけるザトウクジラ資源量については、肝腎のノルウェー北部海域の推定値が出ていないのではっきりしないが、それ以外の海域の合計で約15,000頭（NAMMCO 2011）、年間の増加率は約9%（IWC 2016）となっており、増加率に関して言えば南極海に匹敵する値となっている。船長のダグの話聞いても、遭遇するザトウクジラは年々増えて来ていると言っている。大西洋においても、南極海と同様にザトウクジラ資源は急速に回復しているのだ。

鯨が集まる場所は、すなわち餌生物が集まる場所でもある。彼らはこのベアー島周辺海域で何を食べているのだろうか。船上では衛生上の規則もあり、捕獲された鯨の胃袋を勝手に開くわけにはいかないのだが、大包丁を振るっていた乗組員が、捕獲個体が吐き出した餌を持ってきてくれた。ノルウェー語でロッデ（Lodde）と呼ばれる魚は、カラフトシシャモ *Mallotus villosus* である。この他にこの周辺のミンククジラはシルド（Sild）すなわちタイセイヨウニシン *Clupea harengus* も好むとのことだ。おそらく集まって来るザトウクジラも同じ餌を食べているのであろう。ザトウクジラだけではない。船の周囲にはしばしばタテゴトアザラシの群れ（図3）が物珍しそうにやって来たり、太平洋ではお目にかかれないハナジロカマイルカも、時に船の舳先について華麗なジャンプを見せてくれる。

それだけでも豊饒の海と呼ぶべき光景なのだが、最もこのことを感じさせたのは、鯨もさることながら同じ海域でしばしば遭遇した巨大なトロール漁船だった。漁網を引きながら静々と進む近代的なトロール船の後方には、すさまじい数の海鳥たちが漁のおこぼれにあずかろうと集まっていた（図4）。トロール船が何を漁獲しているのか Kato 号の乗組員に聞くと、「Cod（タイセイヨウダラ？）と Haddock（モンツキダラ？）だ」とのことだ。タラ漁はもっと寒い時期の漁業かと思っていたので意外だった。

ミンククジラを次々と捕獲する Kato 号周辺では、同じ海域で操業する他の捕鯨船の姿もしばしば見られた。ほとんどがレイネヤスボルバーなど、ノルウェー捕鯨の中心地とも言えるロフォーテン諸島から来た捕鯨船で、中には近年建造された新しい船も何隻か見られた（図5）。お互いすぐ近くで作業をしているにもかかわらず、親しく言葉を交わすような様子は見られなかったが、船長同士で漁場に関する情報は交換しているようで、周辺に鯨が少なくなってくると何隻かで一定の間隔をあけ並行して移動し、次の鯨の高密度水域を探す様子がレーダーの映像で見てとれた。

ノルウェーの海には、このような魚、鯨、イルカ、アザラシ、海鳥、そして人間たちが集まるホット・スポット



図3. 船の周りにやって来る、好奇心旺盛なタテゴトアザラシの群れ。



図4. トロール船の後方に群がる海鳥たち。後で調べたところ、この船は2015年に就航したばかりのイギリス船 Kirkella (4,290t) だった。



図5. ベアー島海域で操業する捕鯨船 Reinefangst (左) と Reinebuen (右)。ともに北部にあるノルウェー捕鯨の本場スバルバル諸島の船で、2003年に建造された新しい捕鯨船である。

トとも呼ぶべき水域が多数形成されている。ノルウェーの水産業は1980年代後半に大きく落ち込んだが、その後の厳しい資源管理が功を奏して現在は良好に推移しており、輸出に占める水産物の割合は石油・ガスに次ぐ第二位で、水産物の対日輸出における割合は34.3%で第一位である（在ノルウェー大使館 2014）。自国の豊かな資源と、その持続的利用を可能にしている管理制度に対する自信が、この国の強気の捕鯨政策にも反映されているのであろう。

ところで海鳥と言えば、操業を開始して数日後に変わった出来事があった。朝、いつものようにアッパーブリッジに上がっていくと、砲台の後方にカモメの死体が吊り下がっている。最初はマストのワイヤーに絡まって死んだのかと思っていたのだが、どうも様子が違う。北欧に伝わる大漁祈願のまじないか？などと想像を膨らませてオウドマンに理由を聞いたところ、「鳥除けだ」と言う。周囲に海鳥が多数いるため、油断していると船のデッキ上は鳥の糞だらけになってしまう。甲板は鯨を解体して食肉を生産する場でもあるので、衛生上の理由から鳥の死体をぶら下げて他の鳥を追い払っていると言うのだ。「本当に効果があるのか？」とオウドマンに聞けば、「とても効果がある」ときっぱり言う。そう言えば確かに日本でも、ゴミ捨て場などでのカラスの食害除けとして、カラスの死体のダミーが通販などで売られていた。しかしこのカモメはダミーではなく本物だ。「どうやって捕ったの？」と聞けば「ライフルで撃った。」とのこと。たしか以前に読んだ船の本に、「昔から船乗りたちは、海鳥を殺すと海が時化ると信じて海鳥を大切に扱った」などと書かれていたような記憶があるが、現代ノルウェーの鯨捕りたちはそのような迷信は気にしないようだ。食料として利用するわけでもなく、食品衛生という目的のためにあっさりとして海鳥を射殺する彼らの合理的行動は、ちょっとしたカルチャーショックだった。

操業の監視制度

先にも述べたが、1993年から商業捕鯨を再開したノルウェーは、当時IWCで侃々諤々の議論が行われていた捕鯨の監視制度（RMS）を先取りして、当時30隻以上あった捕鯨船すべてに監視員を毎年搭乗させていた。監視員は鯨の致死時間の計測など動物福祉面での調査を行う責務も負っていたので、1999年に筆者が乗船した時は、監視員は生物学の知識がある獣医師および獣医大の学生から募集しているとの話だった。監視員はノルウェー語で乗組員と意思疎通ができれば必ずしもノルウェー人である必要はなく、反捕鯨国である隣国スウェーデンからも採用されていると聞き、ノルウェー捕鯨の懐の太さに感心したものである。

この監視員による監視制度は、2006年から「Blue Box」と呼ばれる電子自動監視システムに変更され、現在では監視員は時折無作為に選ばれた船に乗るだけである。人間による監視員制度は利点も多いが大変なコストがかかる。ノルウェーは新型の爆発銃の開発を終え、鯨の即死率の大幅向上と致死時間短縮が達成された2004年に、一連の捕殺改善プログラムの終了を宣言して致死時間データの収集を止め、監視員制度から自動監視システムに移行した。すべての捕鯨船に取り付けられたBlue Boxは、航海計器とは独立したGPS（全地球測位システム）で船の航跡を詳細に記録する他、捕鯨砲に備え付けられた圧力センサーにより、捕鯨砲の発砲も自動的に記録する。さらに、ウィンチにかかる荷重により発砲が命中か不命中かを識別でき（不命中ならばウィンチに鯨体の負荷がかからない）、同時に船の傾斜を検出することで甲板への鯨体の引き揚げを検出するという優れた代物である（Øen 2006, eftec 2011）。装置の蓋は封印されており、作業期間中に開封すると警報が発信されて違法行為となる（図6）。ちなみに筆者が16年前にKato号に乗船した時にはすでにこのシステムの試作機が船に搭載されており、当時は「Black Box」と呼んでいた。別に当時と比べて箱の色が変わったわけでもなく、なぜ「黒」の呼び名が「青」になったのかは謎である。

また作業中の捕鯨船は、各船に搭載された衛星通信システムを使って当局に日報を送ることが義務付けられている。日報にはその日の捕獲頭数や鯨肉の生産量が含まれており、白夜の下で24時間作業する捕鯨船では、午前2時が1日分の送信締め切り時間である。送られた日報は当局によって後日Blue Boxの記録と照合され、不正が無いチェックされる。以前は船毎に公式な作業記録用紙があり、船長は捕獲記録のみならず、捕鯨砲の発砲時間から命中・不命中まですべてについて詳細な記載が義務付けられていた。衛星通信システムとBlue Boxの導入で省力化は大幅に進んだが、IT機器の操作に不慣れな漁業者たちは導入時にさぞや苦労したに違いない。船のブリッジに備え付けられたパソコンには、ノルウェー語で「Husk Melding!!」とフェルトペンで大書きされた紙が貼りつけてあった。てっきり「勝手に触るな!」と乗組員に警告しているのかと思っていたところ、後で辞書を引いたら「Remind Reporting（日報を忘れるな!）」との意味だった。船長ダグは、もし日報の送信が午前2時を過ぎると「大変な問題になるんだ」と真面目な顔で言っていた。

鯨を捕る人々

ノルウェー捕鯨の経営形態は、前述の如く、多くの場合家族経営の零細企業とされる。船主は父親か兄弟であり、家族の男たちが同じ船に乗り組んで捕鯨作業をし、父親が引退すると兄弟が船を譲り受け、その息子たちが成長すれば、兄弟で船を分けることもある（大隅 1995）。しかし以前に比べれば捕鯨船の数



図6. Kato号の船首倉庫に設置された自動監視装置Blue Box。装置は封印されており、作業中に開くことはできない。

も減っており、一方でノルウェー第一の捕鯨会社であるLofothvalなどは7隻の捕鯨船を擁しているとのことなので、現在ではノルウェー捕鯨の経営形態もある程度の統廃合が進んでいると言えるだろう。

ミクレバスト捕鯨の船はKato号1隻のみだが、大型船ということもあり乗組員の数が他の船よりも多い。ノルウェー捕鯨船の乗組員数は4～8人とされ（Government of Norway 2013）、大隅（1995）は、ノルウェーの捕鯨船を稼働させるには最低4人が必要であり、1980年代後半における捕鯨船の平均乗員数は4.7人だったと述べている。Kato号には筆者の他に11人の乗組員が乗船しており、このうち船主たるミクレバ

スト家の家族は船長ダグと息子のオウドマンの二人だけで、後の9人はすべて雇用された船員である。ダグによれば、通常は夏の捕鯨シーズンは10人、タラ漁など冬の操業時には増員して12人で操業するのだが、今年は日本輸出向けの白手物製品を船内生産するために増員したとのことだった。

筆者が16年前にKato号に乗った時は、調査員を除き乗組員は8名で、そのうち家族の者は3名だった。かつてに比べると雇用船員が大幅に増えているが、これは船あたりの捕獲頭数が増大したことと、冷凍製品や肉骨粉の生産など、以前に比べて作業量が増加していることが原因である。では彼ら雇用船員たちは皆「鯨捕り（あるいはプロ捕鯨者）」と呼ぶべきであろうか？日本においては、捕鯨船に乗ることは、基本的に船長であろうが砲手であろうが捕鯨（あるいは調査捕鯨を請け負う）会社に雇用され、捕鯨のみで生計を立てるということを意味する。一方、家族経営が多いノルウェー捕鯨船においては、船主あるいはその兄弟・息子が船長・砲手を務めるのが一般的で、Kato号においてもそれは例外ではない。彼ら家族の者が「鯨捕り」であることは明白だが、捕鯨シーズン以外には他の漁業を行うノルウェー捕鯨船で働く雇用船員たちは、「鯨捕り」になりたくて船に乗っているとは限らないだろう。彼らが捕鯨に対して特別な感情を持っているのか、また乗組員の雇用が流動的であるのならば、捕鯨船だけを渡り歩く強者もいるのか、興味の湧くところである。

もとより一隻の船の話だけでノルウェー捕鯨を代表することなどできないことは承知しているが、以下は乗船中に聞きとったKato号乗組員の紹介である（年齢順、名前の発音が難しい者が多いので日本語の呼び名は筆者が便宜的につけている）。

ホルスト：54歳。30年の漁業経験があるベテラン漁師で、坊主頭のいかつい風貌には迫力がある。Kato号では2年目であるが、解剖（大包丁）も担当し、日本向け白手物の等級選別のために雇用されたようだ。最年長の彼に「他の漁業と捕鯨とどちらが面白いか？」と聞いたところ、「仕事としては冬の漁業の方が、休む間もなくずっと厳しい。捕鯨はエキサイティングな狩猟だ。収入としてはどちらも同じくらいだが、両者の漁期が異なるので両方続けている」との話だった。

グレン：45歳。Kato号には15年乗っており、筆者が以前に乗船した翌年から乗っている最古参である。ビヤ樽腹で髭面の大男は事実上の解剖長で、大包丁の他にも仕事は何でもこなす。「去年は1年に270日働いて95万Kr（1500万円）稼いだ」と豪語していたので、少なくともミクレバスト捕鯨の給料は悪くはないようだ。

ウィリー：49歳。Kato号は2年目。以前は延縄漁船に乗っており、南極のロス海にも2回行き、南アフリカの船でメロ（マゼランアイナメ・ライギョダマシ）を捕っていたと言う。主に探鯨担当で、アッパーブリッジで一緒にすることが多かったが、筆者が鯨を発見してもなかなか素直に信用してくれないのには苦勞した。

ルネ：43歳。Kato号には11年乗っているベテランで無口な大男。船の料理長だが、解剖も探鯨もやるとのこと。

アンドレ：37歳。今年初めての乗船。おじが漁業をやっており、11年前から延縄と刺し網漁業に従事していた。ノルウェー南部のオーレスン出身だが、現在はタイ人の妻とタイで暮らしている。タイは暮らしやすい所だとしきりに言い、来年4月（冬の漁期の終わり）まで働いたらタイに帰り、また夏の捕鯨時に戻って来るとのこと。今年は妻を香港のディズニーランドに連れて行ってやるのだと言っていた。

マリウス：28歳。Kato号は2年目。以前は網船で漁業をしていたが、新しいことをやりたくて捕鯨船に乗ったと言う。探鯨、等級選別、解剖を担当する。

ペデ：27歳。オーレスン在住。2歳の息子と、生まれたばかりの娘の父。Kato号には11年乗っているベテラン（つまり16歳からこの船に乗っている事になる）で、解剖（大包丁）を主に担当している。

イワン：24歳。Kato号は3年目。尾鰭の裁割が担当だと言う。童顔の彼に船で一番若いのかと聞いたら、「ボウスキーの方が若い」と不満そうに答えた。写真を撮られる時にいつもポーズをつける、ちょっとあどけない若者だった。

ボウスキー：20歳。最年少の彼は、プロの漁業者ではなくポーランド人の学生である。高校を飛び級で進学したが、学費を稼ぐために5年前から夏期だけ漁船で働いているという努力家だ。父親も漁師だとのことで、来年からの大学入学に備え、Kato号には知り合いの船長の紹介で昨年10月から乗っていると言う。ちなみにポーランドはEUに加盟しており、IWCのメンバーでもあるが、他のEU加盟国と同様に反捕鯨国でもある。捕鯨についてはどう思っているのか聞いてみたところ、「鯨は他の動物と同じだと考えているので、なぜEU加盟国の人々が捕鯨に反対するのか自分にはわからない。」と答える一方、「家族は（捕鯨船に乗ると聞いて）いささかショックを受けたようだが、強くは反対しなかった。」ともっており、欧州における捕鯨反対の考えは根深いようにも感じた。大学では経済学と経営学を学び、将来は自分の会社を興したいと語る彼は、仕事時間以外はいつも一人である。「他の乗組員たちとは話が合わない（筆者が）話しかけてくれて嬉しい。」と言われ、他の若い乗組員の中には自分の名前の綴りを書くことすら怪しい者が何人かいたことを思い出した。インテリの青年は船内でいささか孤独なようだ。

操業の合間の取材でもあり、筆者の能力では彼らの心の内まで尋ねることまではできなかったが、Kato号における雇用船員の乗船経歴は1年～15年で、9人中3年以下が6名、10年以上が3名と、経験年数に大きな違いがあった。先の航海で下船した乗組員と交代した者もいるのではっきりしたことはわからないが、中核となるベテラン数名が固定化し、他は流動的な船員という印象を受けた。

漁業大国ノルウェーにおいて、1年のうち夏期だけの季節漁業である捕鯨を行う船は数少ない。Kato号にやって来る船員たちは、捕鯨に対してベテラン漁師をして「エキサイティング」と言わせる魅力を感じているのかもしれない（船長のダグがまさにそうなのだが）が、聞いた限りでは他の捕鯨船経験者はおらず、単にミクレバスト捕鯨の給料が（一般漁船も含めて）他の船よりも良いだけなのかもしれない。他の捕鯨船との比較を含め、この点は今後の調査課題の一つである。

鯨肉の食事情

日本の捕鯨船では、調査捕鯨を含め船内の食事に鯨肉が使われるのは普通であり、特に長期航海を行う南極海の調査捕鯨船団などでは、新鮮な鯨肉は乗組員の大きな楽しみでもある。一方、Kato号においては、11日間という短い乗船期間だったが鯨肉が食卓に出ることは一度もなかった。料理長のルネに尋ねたところ、船で鯨肉を料理するのは一ヶ月に一回程度だと言う。捕鯨の操業が一航海2週間程度であることを考えれば、捕鯨シーズンですら二航海に一度の割合である。もともとノルウェーの人々は鯨の生肉を食べる習慣がないのはわかっているが、乗組員たちが特に食事のメニューに鯨肉を求めている様子は感じられなかった。

彼らが家庭でどのくらいの頻度で鯨の肉を食べているのか、試しに何人かの乗組員に聞いてみた。ともに捕鯨船に11年乗っている料理長のルネは年に10回くらい、ベデは年に3回くらいと言う。若いイワンは意外に多く月に1回は食べるとのこと。ポーランド人のボウスキーは、当然まったく家庭で食べた経験はないが、「これからは食べるかもしれない」と控えめな意欲を示していた。ちなみに筆者自身は年に10回と言ったところだろうか。彼らにせよ自分自身にせよ、鯨に関わりのある仕事をしていながらも、鯨肉は普段の食材とは言い難い。

ノルウェー国内における鯨肉の消費は、2009年時点で国内流通量が約1,000tで、国民一人当たり年間

250g とされる (NOAH 2011)。少ないように見えるが、日本における鯨肉の消費は、2012 年の調査で国民一人当たり一日 0.1g とされ (総務省 2015)、年間に直せば 36g にすぎない。報道によれば、調査捕鯨の鯨肉を販売する共同船舶の 2008 年の調査で、県別の鯨肉消費は長崎県が最も多かったが、それでも一人当たり年間 177.4 g である (神戸新聞 2008 年 6 月 5 日)。統計値を見る限りでは、ノルウェー人の方が日本人よりもずっと多く鯨肉を食べていると言えるだろう。前述の如く、国民の鯨食離れはノルウェーも日本も同様で、特に若い世代が鯨を食べなくなって来たと言われている。ノルウェーでは、鯨肉の消費を増やすために国を挙げて様々な戦略をたてた結果、消費は上向きになりつつあるとのことだが、日本ではどうか。鯨肉業界の市場拡大の努力を知らないわけではないが、客観的には都市部での居酒屋のメニューが増えたくらいの印象しかない。



図7. ノルウェー北部の都市トロムソの大型スーパーマーケット EUROSPAR で販売されていたミンククジラ鯨肉。ノルウェー最大の捕鯨会社 Lofothval 社の製品で、生肉の真空パックで鮮魚売り場に置かれていた。

日本の鯨肉消費が伸びない理由の一つに、価格が高すぎるといえることがよく言われる。国内鯨肉の価格は、南氷洋捕鯨からの供給が最も多かった時代である 1961 年にはわずか 163 円/kg (東京都区部) で、当時畜肉で最も安い鶏肉の 501 円/kg よりもはるかに安かった。IWC による捕獲規制が厳しくなった 1975 年になって、初めて鶏肉の価格 (990 円/kg) より高くなり 1,030 円/kg となったが、依然として豚肉 (1,550 円/kg) や牛肉 (2,710 円/kg) よりはかなり安い。ちなみにこの年のマグロ赤身は 2,950 円/kg となっている (総理府 1983)。現在の鯨肉価格をインターネットで見ると、ミンククジラやイワシクジラなどのヒゲクジラ類の赤肉は 5,000 円/kg 前後が相場で、これはおおよそ国産和牛の切り落とし肉や、輸入牛では

サーロインステーキ用の肉の価格に相当する。実際に市場に出回る量の差を考えると、現代の消費者が同じ値段でどちらを選ぶかは想像に難くないだろう。

一方、ノルウェー国内での鯨肉価格は、北部の街トロムソのスーパーマーケット (EUROSPAR) で調べたところ、「特売」としてではあるが 1,600 円/kg で販売されていた (図7)。ちなみにノルウェーでも、鯨肉は日本と同じく畜肉ではなくタラやサーモンなどの魚と一緒に水産物の売り場に並んでいる。隣の売り場で販売されていた豚肉 (1,100 円/kg) よりも高かったが、牛サーロインステーキ (4,600 円/kg) に比

品名	価格(/kg)	日本円価格	調査店
鯨ステーキ (Lofothval) 特売品	99.9 kr	1600	EUROSPAR
牛ランプステーキ	189 kr	3000	EUROSPAR
牛サーロインステーキ	289 kr	4600	EUROSPAR
豚切り身	69.9 kr	1100	EUROSPAR
ヘラジカステーキ	199 kr	3200	EUROSPAR
トナカイステーキ	299 kr	4800	EUROSPAR
鯨ステーキ (ミクレバスト捕鯨)	160 kr	2600	ネット通販
鯨小切れ (ミクレバスト捕鯨)	90 kr	1400	ネット通販
鯨赤身肉 (日本・主にイワシ肉)	—	4800~6000	ネット通販

表1. ノルウェーの鯨肉と畜肉価格。参考までに日本国内での鯨肉価格も列記した。日本円は1クローネを16円で計算して100円以下は四捨五入した。EUROSPARはトロムソ店で調査した。

べればはるかに安かった（表1）。ただこの鯨肉の価格は、捕鯨シーズン中でもあり、漁場に近い北部の街の店の特売価格であることを考えると、国内でもかなり安い方だと言えそうだ。ミクレバスト捕鯨がインターネット通販で販売するブランド「ノルウェー海の高品質鯨肉」は、小切れ肉だと1,440円/kgだがステーキ用のBiffだと2,560円/kgもする。なお、同じスーパーでは北欧の街らしくトナカイやヘラジカなどの肉も冷凍で販売されていたが、ステーキ用の肉は牛とほぼ同じかそれ以上の値段で、決して安くはなかった。

鯨肉の流通制度と捕獲の問題

鯨を含め、ノルウェーにおける水産物の流通は特殊である。同国では、1951年に制定された鮮魚法（Raw Fish Act）に基づき、すべての漁獲物は地域、魚種別に組織された販売組合を通して流通（第一次販売）することが義務付けられており、漁業者は漁獲物を自由に販売することができない（在ノルウェー日本大使館 2014）。この販売組合は地域・魚種別に複数設立されている民間団体で、組合に加盟する漁船ごとに、船が操業中から組合のウェブサイトを通じて漁獲物のオークションを実施して販売を行う。販売組合の目的は水産資源の持続的利用と漁業者の安定収入の確保にあり、オークション情報をもとに各漁船の漁獲を管理することで過剰捕獲を未然に防ぐ機能を持つほか、オークションにかける水産物の最低価格を事前に決定することで、漁業者の収入を保証している。

鯨を取り扱っている組合はノルウェー漁業販売組合（Norges Råfisklag: The Norwegian Fisherman's Sales Organization）で、ウェブサイトの説明によれば、同組合はノルウェー南西部から北東部までの広範囲に水揚げされる魚介類を取り扱い、2013年には4,859隻の漁船の漁獲物を179社の水産企業に売却したとある（Norges Råfisklag 2016）。Kato号が捕獲する鯨肉もすべてこの販売組合に売却されるのだが、組合は鯨が捕れ過ぎて鯨肉がだぶつかないように捕獲数を管理する権限がある。実際、筆者が1999年に乗船した際も、乗船直前にノルウェー北部海域での捕鯨操業が停止されてしまい、Kato号の出港は大幅に遅れて結局南部の北海で操業したことがあった。当時は、操業の停止が「政府の指示ではなく販売組合の都合だ」と説明を聞いても良く理解できなかったのだが、ノルウェーの捕鯨は、年間の捕獲枠設定や操業監視などは政府の管理下にあっても、実際の船ごとの捕獲数や鯨肉の販売価格は同国の他種の漁業と同じく民間の販売組合の管理下にあるのだ。多種多様な漁獲物販売を一手に扱う大きな販売組合の存在は、自分たちの利益を優先させがちな業種ごとの組合よりも、過剰捕獲を抑制して水産物の価格を安定させやすく、長い目で見て漁業者のメリットがあるということなのだろう。

ただ、船長のダグによれば、他の捕鯨者は自船の捕獲頭数を事前に組合と調整するのが普通だが、Kato号すなわちミクレバスト捕鯨では、規則に従って販売組合にすべての鯨肉を一旦売却した後に、手数料を払うことで一部を買い戻して冷凍保管し、独自のルートを通じて高値で売っているのだと言う。高品質の製品を製造することで、他の捕鯨業者よりも高い値で売る自信があればこそできることだが、これを可能にしているのは、後述するようにミクレバスト捕鯨が自前の鯨肉加工工場を持っていることが大きな理由であろう。他の大手捕鯨業者も同様の手法を使っているらしく、WDC（2015）は、ノルウェー漁業販売組合が直接販売している鯨肉は全体の約80%だと指摘している。

では近年1,000頭を超える捕獲枠がありながら、ノルウェー捕鯨船が毎年その半分程度しか捕獲を行っていない原因も、鯨肉の価格安定や鯨の資源管理を目指す販売組合の戦略なのであろうか？答えはいささか複雑なようだ。WDC（2015）によれば、ノルウェー漁業販売組合は、2000年代下旬に捕鯨者及び鯨肉販売業者から鯨肉1kgあたりそれぞれ30～50 øre（5円～8円）の手数料を取って、同組合の管理する販売圏で大規模な鯨肉消費キャンペーンを行ったとされる。今や北東大西洋のミンククジラ資源が健全であることは科学的に示されており（NAMMCO 2011, IWC 2016）、先にも述べたように、ノルウェー政府も捕

鯨業界も市場拡大に力を入れた結果として鯨肉消費は向上している中、販売組合がそれを抑制する理由はあまりない。

一方、NAMMCO の報告によれば、ノルウェー政府はミンククジラ捕獲枠が達成できない理由として、「いくつかの理由があるが、捕獲した鯨肉の加工に問題があること及び、ヤン・マイン島や東部バレンツ海などの漁場が遠い（ために頻繁な往復が難しい）ことがある」との説明を繰り返し行っている（NAMMCO 2012, 2013）。後者の漁場が遠いとされる問題の解決には沖合で長期操業できる Kato 号のような捕鯨船が増えることが重要であるが、近年わずかではあるが新しい捕鯨船が増加傾向にあるので改善されつつあると言えよう。捕獲頭数が抑制されている大きな問題はむしろ前者の鯨肉加工にあるようだ。

沿岸の鯨肉加工場は、商業捕鯨の一時停止以来多くが閉鎖されてしまった。ノルウェー捕鯨の事情に詳しいオーエン博士によれば、現在稼働している水産物加工場のほとんどは他の漁獲物を主に扱っており、基本的にタラや養殖サケ等の加工で手一杯だと言う。現在の規則では、魚類を処理している加工場は連続して鯨肉を処理することができない。魚類を扱っている加工場で鯨肉を処理するためには、一旦製造ラインを完全に洗浄せねばならず、当然ながら鯨肉の処理後も同様の処置が必要となる。このため加工場の中にはシーズン中に一回のみ鯨肉を購入して処理し、その後は魚しか扱わない所もあるとの事だ。ミクレバスト捕鯨のような自前の加工場を持つ業者にとっては問題ないが、鯨の捕獲のみを行う小規模の捕鯨者たちは、加工場が鯨肉を購入してくれなければ捕獲頭数を増やすことができず、結果として捕獲枠に達しない年が続いている。捕鯨者の鯨肉の販売を代行する販売組合も、加工場が購入意欲を見せなければ、小規模捕鯨業者の捕獲を抑制せざるを得ないに違いない。ノルウェーの捕鯨業界や政府がこの点についてどのような対策をとろうとしているのかは不明だが、零細業者に不利な状況が続けば、今後ノルウェー国内の捕鯨業は統廃合と寡占化が進むのかもしれない。

おわりに～鯨捕りの1年と心意気

6月13日に出港した Kato 号は、26頭のミンククジラを捕獲して今期2回目の漁を終え、6月22日に出港地と同じハンメルフェストに入港した。北の漁場から遠いノルウェー南部に加工場を持つ Kato 号は、この北部の町の港で積み荷を降ろしてただちに再出港し、降ろした積み荷はトラックで加工場に陸送されるのだという。日本向けの冷凍品は、別途南部にあるオーレスンの冷凍庫まで運ばれ、船積みの時まで保管される。

水冷されていた鯨肉の大きな塊が船倉から引き揚げられると、捕獲番号ごとに札のつけられた大型のプラスチックタンクに順に入れられていった。ミクレバスト捕鯨が重視する鯨肉のトレーサビリティはしっかり守られているようだ。荷下ろし中に宅配便の業者が来て、操業中に船長のダグと息子のオウドマンが丁寧に集めていた DNA や PCB 分析用の標本の包みを、検査機関に送るために持っていった。どこの国でも変わらぬであろう入港風景に、一瞬日本の調査船に乗っていたかのような錯覚を覚えた。

下船の準備をしながら、オウドマンとノルウェーと日本の捕鯨の違いについて少し話をした。オウドマンもそうだが、日本の事情をよく知るノルウェー捕鯨者たちは、日本の捕鯨船の装備する鯨探や追尾方法について特に関心が高い。「鯨探は鯨を驚かすので、船の速力がよほど速くないと効果が無いよ。」と説明をする一方、Kato 号に取り付けられていた骨の粉碎装置や肉骨粉の冷凍機などの独創的な設備を褒めると、オウドマンは「僕と父とでいろいろと考えて作ったんだ。」と嬉しそうに答えた。オウドマンは今期の捕鯨が終われば、また石油掘削を学ぶ学校へ戻る。自分の将来にまだ迷う彼には、「どちらの道を進むにせよ、自分のスペシャリティ（専門分野）が複数あれば、学んだことは必ず将来の役に立つよ。」と、我が身を振り返りつつささやかな人生訓を伝えた。赤外線で鯨を探せないだろうかという新しいアイデアを練る彼は、き

と良い捕鯨の後継者になるに違いない。

4月から9月まで続くノルウェーの捕鯨シーズンの中で、Kato号は5月から8月まで捕鯨を続け、1カ月の休暇の後に10月から翌年4月までが冬の漁期となる。ダグによれば、冬の漁はタラ（Saida cod：ホッキョクダラと思われる）やカレイ（Blue halibut：カラスガレイ）などが主な獲物で、収入は捕鯨の二倍にもなるそうだ。大手捕鯨会社であるミクレバストといえども捕鯨業だけで会社が成り立つわけではなく、1年の操業周期に組み込まれた冬の漁業は不可欠である。しかし昨年から力を入れている日本向け製品輸出が成功すれば、今後は捕鯨による収益の割合は増加していくことだろう。

ところで、Kato号とミクレバスト家の歴史のところで説明したが、Kato号はノルウェーが1987年に商業捕鯨を中断して1993年に再開した後もしばらく捕鯨業に戻らず、1998年によく捕鯨を再開している。捕鯨を中断していた期間に何をしていたのかダグに尋ねたところ、「夏の間はオヒョウを捕って、日本、台湾やドイツに輸出していた」と言う。また商業捕鯨が再開された後の1994～1996年は、「日本人がRed Fishと呼んでいる大型の魚を日本向けに捕っていたのだが、これはものすごくいい値が付いた。」とのこと。思わず、「ではなぜミクレバスト家は捕鯨に戻ったのだろうか？夏の間もそれだけ儲かっていたのなら、そのまま漁業を続けるという選択もあったのではないかな。」と聞いたところ、ダグは少しの間思索して答えた。「捕鯨を再開したのは、この先捕鯨がビジネスとして儲かると思ったし、何より捕鯨をすることに誇りを感じたからだな。まあ、血（blood）ってやつだよ。だいたい、1年中漁業だけやっていたら飽きちまうじゃないか。1年は漁業（fishing）、捕鯨（whaling）、漁業（fishing）のテンポが良いんだよ！」

ノルウェー捕鯨者にとって、捕鯨は単に生活の糧を稼ぐ手段ではない。捕鯨は「エキサイティングな狩猟」であり、捕鯨を続けることは自分と家族のアイデンティティを維持し、捕鯨者としての誇りを守ることでもある。ノルウェー捕鯨は利潤を求める商業捕鯨ではあるが、鯨を捕ろうとする動機は、例えばアラスカ先住民たちが守り抜こうとしている伝統捕鯨と根底では変わるところがないのではないだろうか。船長ダグが、息子に跡を継がせるためには捕鯨を儲かるビジネスにしなければならないと語るように、捕鯨の将来にわたる継続には経済的な安定が不可欠である。鯨肉市場の拡大や輸出の成功はその大きな要因として期待される一方、加工場の不足という問題もあり、ノルウェー捕鯨の発展はまだ途上にあると言えよう。しかしそれでも、新しい世代の後継者たちが鯨捕りとしての誇りを持ち続ける限り、本文冒頭に掲げられた疑問である「ノルウェー捕鯨は衰退し消滅するのか？」の答えは、否やと言って間違いはあるまい。

謝辞

今回の取材にあたり、突然の要望にも関わらず捕鯨船への仲介をしていただき、またご自宅で暖かいもてなしをいただいた、古い友人であり捕鯨研究の師匠でもあるエギル・オーエン博士に深く感謝します。また同様に、突然の乗船取材の依頼をふたつ返事で承諾し、船の一員として受け入れてくれただけでなく、忙しい操業中にも関わらず細かい質問に応じてくれたダグ・ミクレバスト船長に深い感謝と敬意を表します。また16年ぶりにノルウェー捕鯨を調査する機会をいただいた、国立民族学博物館研究戦略センターの岸上伸啓教授に感謝します。（一財）日本鯨類研究所の久場朋子氏には、本文の執筆にあたり、同研究所に所蔵される文献の閲覧と複写に尽力いただいたほか、ノルウェー語で記載されたウェブサイト翻訳にご協力をいただきました。ありがとうございました。

訂正：鯨研通信471号に掲載した「現代ノルウェーの捕鯨(2) - 日本との技術比較と鯨肉消費拡大の努力 -」において、筆者の前回Kato号乗船を「15年前」と記載したが、「16年前」の誤りである（p20の9行目、p26の1行目）。ここに訂正する。

【本報告は、国立民族学博物館の平成 27 年度科学研究費補助金（基礎研究 A）「グローバル化時代の捕鯨文化に関する人類学的研究－伝統継承と反捕鯨運動の相克」による成果の一部です。】

参考文献

- Economics for the Environment Consultancy Ltd (eftec) 2011. Norwegian use of whales: past, present and future trends. 84pp.
- Government of Norway. 2013. Norwegian whaling – based on a balanced ecosystem. http://www.fisheries.no/ecosystems-and-stocks/marine_stocks/mammals/whales/whaling/#.VsbWGF9pCM8
- IUCN. 2008. The IUCN Red List of Threatened Species: *Megaptera novaeangliae*. <http://dx.doi.org/10.2305/IUCN.UK.2008.RLTS.T13006A3405371.en>
- IWC. 2016. Whale Population Estimates. <https://iwc.int/estimate#table>
- 松岡耕二. 2009. 南半球産ザトウクジラ資源の急速な回復. 鯨研通信 443. 18-20.
- Matsuoka, K., Hakamada, T., Kiwada, H., Murase, H. and Nishiwaki, S. 2011. Abundance estimates and trends for humpback whales (*Megaptera novaeangliae*) in Antarctic Areas IV and V based on JARPA sighting data. *J. CETACEAN RES. MANAGE. (SPECIAL ISSUE)* 3. 75-94.
- Murase, H., Matsuoka, K., Hakamada, T. and Kitakado, T. 2014. Preliminary analysis of changes in spatial distribution of Antarctic minke and humpback whales in Area IV during the period of JARPA and JARPAII from 1989 to 2006. Document SC/F14/J18 submitted to the JARPAII REVIEW meeting called by the International Whaling Commission.
- NAMMCO. 2011. NAMMCO Annual Report 2010. North Atlantic Marine Mammal Commission. Tromsø. Norway.
- NAMMCO. 2012. NAMMCO Annual Report 2011. North Atlantic Marine Mammal Commission. Tromsø. Norway.
- NAMMCO. 2013. NAMMCO Annual Report 2012. North Atlantic Marine Mammal Commission. Tromsø. Norway.
- NOAH-for dyrs rettigheter, Dyrebeskyttelsen Norge and World Society for the Protection of Animals. 2011. Seas of Change : why Norwegian whaling belongs in the past. Pamphlet distributed at 63th IWC meeting. 19pp.
- Norges Råfisklag. 2016. The Norwegian Fisherman's Sales Organization. http://www.rafisklaget.no/portal/page/portal/NR/Omoss/Norwegian_fishermens_sales_organization
- 大隅清治. 1995. ノルウエイの小型捕鯨. 鯨研通信 385. 8-15.
- Øen, E. 2006. Norwegian minke whaling. Research to improve hunting and killing methods for minke whales in Norway. Document IWC/58/WKM & AWI 25 submitted to the Workshop on Whale Killing Methods. St. Kitts & Nevis. June 2006.
- 総理府統計局. 1983. 小売物価統計調査 20 年報. 96-99.
- 総務省統計局. 2015. 平成 24 年度食料需給表Ⅱ食料需給表 3 品目別累年表 7. 肉類 (7) 鯨 <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001131797>
- WDC. 2015. Whaling in Norway. <http://us.whales.org/issues/whaling-in-norway>.
- 在ノルウェー日本国大使館. 2014. ノルウェーの漁業. http://www.no.emb-japan.go.jp/Japanese/Nikokukan/nikokukan_files/noruweinogyogyou.pdf

日本鯨類研究所関連トピックス（2016年9月～2016年11月）

2016JARPNII 釧路沖鯨類捕獲調査

2016年のJARPN II 釧路沖鯨類捕獲調査が、9月5日～10月31日かけて実施された。開始当日は、調査船の係留する岸壁において出港式が挙行され、伊東良孝衆議院議員、鈴木貴子衆議院議員、蛭名大也市長をはじめとする釧路市及び水産業界関係者が多数参加して、航海の安全と調査の成功を祈念した。(研)水産研究・教育機構の国際水産資源研究所(国際水研)の吉田英可調査団長が、調査団を代表して、目標達成にむけた意気込みを述べた。この秋の釧路沖調査は、一般社団法人地域捕鯨推進協会が実施主体となり、東京海洋大学大学院の加藤秀弘教授を調査総括とし、国際水研が調査主管を努めている調査であり、当研究所からは安永玄太室長、中井和佳研究員、井上聡子研究員が化学調査班として参加した。調査は、釧路港を基点として半径50海里の水域を調査海域とし、小型捕鯨船4隻を用いて捕獲調査を行い、釧路郊外の鯨体調査所にて鯨体の生物調査を実施している。

今次調査では、この夏に3つの台風が北海道を直撃するなどして、例年になく、台風や低気圧の影響を受けることが多く、調査船が出港できない日が続き、調査終了となる10月31日までに予定標本数である51頭の捕獲を達成できず、21頭の標本数をもって47日間に及ぶ調査を終了した。ミンククジラの胃内容物は、マイワシやサバ族魚類が多数観察され、餌種の変化が認められ、ミンククジラの柔軟な食性を示す結果が得られた。なお、JARPN IIは、2014年3月31日のICJ判決を受けた政府の判断により、本年度調査をもって終了とし、来年度からは新たに策定中のNEWREP-NPにより捕獲調査を実施する予定となっている。

ベルギー研究者の表敬訪問とレクチャー

9月5日にMilinkovitch教授が来日して、当研究所に表敬訪問をした。また、同日東京海洋大学にて「The EvoDevo & Physics of Skin Appendage and Skin Colour patterning in Vertebrates」という題で講演を行った。

IWC-POWER 調査計画会議

本会合は9月15～18日の4日間、水産庁勝どき船員詰所において開催された。東京海洋大学大学院加藤教授が議長を務め、IWC科学主任ドノバン氏をはじめ、科学委員会メンバー、水産庁、国際水産資源研究所、当研究所、共同船舶株式会社の関係者ら5か国(日・英・米・露・豪)22名が出席し、当研究所からは松岡調査研究部次長及び袴田調査研究部室長が参加した。会合では、2017-2019年に予定されているベアリング海調査について、調査船船長らを含めて詳細な計画が議論されたほか、IWC-POWER調査プログラムの下、7回の調査が完了し、過去数十年間調査が実施されていなかった北太平洋の海域を網羅し、多くの有用な目視データ、画像データ、遺伝標本が収集され分析が進められていることが確認され、来年以降のベアリング海調査においても、引き続き沿岸国からのサポートが得られるようIWC本会議で要請すること等が確認された。翌19～20日には、同会場においてIWC/IDCR-SOWER特集号編集会議が開催された。

日本哺乳類学会での講演

9月23日筑波大学で開催された日本哺乳類学会の自由集会「鯨類の食物消費量算出に向けて」において、田村調査研究部部長が「鯨類の食物消費量推定」という題で講演を行った。

当研究所定時理事会の開催

当研究所の定時理事会が9月28日に開催され、①平成28年度事業計画（案）及び収支予算（案）承認の件及び②「理事会運営規則」一部改正の件について審議され、原案どおり可決された。

東京家政大学ワークショップの開催

子ども達の学校給食を賄う栄養士の平均年齢が40歳を切った今、これまでの人生において鯨肉を食べたことがない栄養士が半数以上を占めている。将来栄養士を目指す学生達に鯨肉の美味しさ、栄養価及び鯨を取り巻く現況等を知ってもらうため、NPO海のくに・日本に業務を委託して9月29日にワークショップを開催した。

東京家政大学ヒューマンライフ支援センターの内野美恵准教授の授業において、白石ユリ子理事長が「クジラから世界が見える～なぜ日本はクジラを手放してはいけないのか～」と題する講演を行った。日本人と鯨の関わり、鯨を取り巻く現状、鯨の栄養価、日本の自給率の低さ、世界における肉食と魚食の割合等、多岐に亘った盛りだくさんの内容となった。約40名の生徒は大学1年生で、鯨肉を食べたことがない人達が多かったので、鯨肉を食する機会を与えるため授業終了時に鯨の缶詰を配った。

IWC 事前論説委員レクチャーの開催

10月に開催される第66回IWC本会議に先立ち、主要新聞社の論説委員等マスコミ関係者を対象にしたレクチャーを、日本捕鯨協会に業務を委託して10月14日に開催した。

IWC日本政府代表の森下文二東京海洋大学教授に、捕鯨問題をめぐる背景や今次年次会議で争点となる各テーマについて説明した上で、会議に臨む日本政府代表団の方針と戦略を語っていただいた。NHK、読売新聞、毎日新聞、朝日新聞及び産経新聞等から11名が参加し、森下IWC日本政府代表のレクチャーの後は活発な質疑応答があった。質疑応答後は、鯨料理を囲みながらの懇談の場を設け、意見交換を重ねた。

巢鴨くじら祭りの開催

昨年までは、鯨の持つ栄養的な価値をテーマに巢鴨くじら祭りが開催されてきたが、第3回目となる今年は、鯨の持つ栄養的な価値を伝えることはもちろんのこと、巢鴨という地元を巻き込んでイベントが開催できるように、NPO海のくに・日本に業務を委託して10月16日に巢鴨くじら祭りを開催した。

イベント前日には豊島区立清和小学校の家庭科室をお借りして、NPO海のくに・日本のスタッフが試食用くじら汁を豊島区のボランティアの皆様と一緒につくった。イベント当日は、地元大正大学の学生ボランティアに来ていただき、1,000人分のくじら汁と一緒に配布した。

午前中からちんどんが巢鴨地藏通り商店街を練り歩き、午後開催のくじら祭りの宣伝をおこなった。会場となるすがもん広場では、大道芸人佐藤まさ志氏による日本伝統の大道芸がおこなわれ、広場にいる人達を楽しませた。また、NPOクジラ食文化を守る会が、鯨肉缶詰やジャーキー等を販売した。午後2時からくじら祭りが開催され、開会式には諸貫水産庁国際課漁業交渉官、菅谷豊島区教育委員会委員長及び木崎巢鴨地藏通り商店街理事長から挨拶があった。その後、三遊亭金八師匠によるくじら落語会が開かれ、くじら川柳の大賞発表・授与式も行われた。くじらのゆるキャラパレニンちゃんも登場して子ども達と写真撮影を行い、盛況の内に幕を閉じた。

恵比寿鯨祭の開催

第4回目となる今年の恵比寿鯨祭は、「くじらがとりもつ縁」をテーマに、日本全国の捕鯨地区と恵比寿

地区にある飲食店とのコラボレーションを行うため、恵比寿鯨祭実行委員会に業務を委託して10月18日～22日の期間で開催された。10月18日には、渋谷でオープニングイベントが開催され、来賓として水産庁資源管理部国際課の黒川淳一課長が出席した。また今回参加する地方自治体の代表者が、各地域の鯨食文化について説明した。今年は鯨祭に12店舗が参加し、その中の7店舗は地方自治体（網走市、釧路市、石巻市、南房総市、太地町、下関市、長門市）とタイアップして、鯨メニューを考案した他、各地の地場食材を使ったメニューを提案した、鯨祭期間中の注文合計数は535件に及び、恵比寿鯨祭の認知とともに、鯨料理の注文が増えた。

恵比寿鯨祭に先立ち、10月9日に開催された恵比寿ビール坂祭りでは、鯨祭の告知と集客を目的としたサテライトブースを展開した。築地場外市場の鯨の登美粋に協力していただき、鯨の竜田揚げを販売し、鯨祭冊子を配布した。

第66回 IWC 本会議の開催

第66回 IWC 作業部会が10月19日～22日、本会議が10月24日～28日までポルトロージュ（スロベニア共和国）において開催された。今年の会合では IWC 加盟国 88 カ国のうち 67 カ国が出席した。日本からは、森下丈二 IWC 日本政府代表、香川謙二農林水産省顧問、諸貫秀樹水産庁資源管理部国際課漁業交渉官、田中一成外務省経済局漁業室長他、が出席した。また、3名の国会議員が参加し、当研究所からは、藤瀬理事長の他所員2名が参加した。

本会議では鯨類科学調査に関する豪州・NZ 決議が採択された。これは、科学委員会による現行の調査評価手続を変更するものではないが、総会がその下に新たに設置する作業部会の助言を得て、鯨類科学調査計画（北西太平洋の新調査計画案や、昨年度から実施している新南極海鯨類科学調査（NEWREP-A）の中間・最終評価）について意見を表明することを決定する内容である。

ブラジル、アルゼンチンらが共同提案した南大西洋サンクチュアリー提案は今回も否決された。海上の安全では今年結審したシーシェパード（SS）裁判の結果を報告しつつ、引き続き捕獲調査に対する妨害行為につき、関係国がその再発防止のための実効的な措置をとるよう再度要請した。また、沿岸小型捕鯨については、日本から賛否対立を根本的に議論することを提案し、「IWC の将来」で鯨類に対する根本的な意見の違いを踏まえた今後の IWC の道筋に関して、締約国らと次回総会までに透明性のある形で議論を交わすこととなった。

IWC マニーニ議長（スイス連邦）は任期満了のため退任、新議長には副議長であった森下政府代表（日本）、副議長にはビビッチ政府代表（スロベニア共和国）が選出された。なお、2017年の科学委員会はスロベニアで、2018年の本会議はブラジル、科学委員会はケニアで開催されることが決まった。

当研究所の創立記念日

当研究所第29回目の創立記念祝賀会を10月31日に、当所会議室で行った。

「豊島区栄養士ワークショップ」の開催

小中学校の学校給食を賄う栄養士は、子ども達の食に対して大きな影響力を持っているが、鯨肉を食べたことのない世代が増えている。鯨肉の良さや栄養価等の情報を栄養士に提供するため、NPO 海のくに・日本に業務を委託して、「クジラのお話と鯨料理ワークショップ」を11月1日に開催した。

ワークショップは東京都豊島区の南池袋小学校家庭科室で行われ、豊島区の栄養士26名に参加していた。白石ユリ子理事長から捕鯨の歴史や現状、食料自給率及び鯨食文化等についての話がいった後、

佐伯理華栄養士から鯨肉や皮の説明があった。鯨の竜田揚げとくじら汁を全員で試食しながら、順番で竜田揚げの揚げ方について勉強した。

PICES 会議への参加

2016年PICES年次会合が、11月2日～13日までサンディエゴ（アメリカ）において開催された。当研究所からは、田村調査研究部部長がIWCSのオブザーバーとして参加し、また捕獲調査の成果であるヒゲクジラ類の長期的な食性の変化について発表した。来年は、ウラジオストック（ロシア）で開催予定である。

第23回北大西洋海産哺乳動物委員会（NAMMCO）科学委員会への参加

第23回北大西洋海産哺乳動物委員会が2016年11月4日～7日にグリーンランドのヌーク（Nuuk）で開催された。会合の議長はノルウェーのハウグ博士が務めた。NAMMCO加盟国からグリーンランド6名、ノルウェー4名、フェロー諸島1名、アイスランド4名に事務局3名を加えた計18名が参加した。日本から当研究所の坂東調査研究部室長及びロシアとカナダからそれぞれ1名がオブザーバーとして参加した。会合の主な議題は1) 他機関との協力、2) 環境及び生態系関連、3) 鰭脚類：資源の現状と政策決定機関への助言、4) 鯨類：資源の現状と政策決定機関への助言、5) 調査計画策定であった。日本から参加したオブザーバーは、日本の鯨類研究の進捗状況について発表を行った。

当研究所定時理事会の開催

当研究所の定時理事会が11月14日に開催され、①平成27年度事業報告（案）、計算書類（案）及びこれらの附属明細書（案）の承認の件、②平成27年度公益目的支出計画実施報告書（案）の承認の件、及び③定時評議員会の招集について審議され、原案どおり可決された。

「新宿区栄養士ワークショップ」の開催

小中学校の学校給食を賄う栄養士は、子ども達の食に対して大きな影響力を持っているが、鯨肉を食べたことのない世代が増えている。鯨肉の良さや栄養価等の情報を栄養士に提供するため、NPO海のくに・日本に業務を委託して、「クジラのお話と鯨料理ワークショップ」を11月15日に開催した。

ワークショップは東京都新宿区の西富山中学校家庭科室で行われ、新宿区の栄養士11名に参加していただいた。白石ユリ子理事長から捕鯨の歴史や現状、食料自給率及び鯨食文化等についての話があった後、佐伯理華栄養士から鯨肉、皮及び鯨の大和煮缶詰の説明があった。鯨の竜田揚げとくじら汁を全員で試食しながら、順番で竜田揚げの揚げ方について指導してもらった。また給食用のメニューとして、大和和煮缶詰からも簡単に作ることが出来て栄養価が高く美味しい鯨のしぐれ煮や鯨丼といった料理レシピも伝授してもらった。

NEWREP-A 調査船団の出港

2016/17年南極海鯨類科学調査（NEWREP-A）は、11月16日に第七開洋丸が八戸から、17日に第三勇新丸が塩竈から、18日に調査母船日新丸が因島、目視採集船2隻（勇新丸、第二勇新丸）が下関からそれぞれ出港して、調査海域に向かった。調査母船日新丸の出港式には、保科水産庁増殖推進部長をはじめとする多くの関係者が出席し、乗組員は航海の安全と調査の成功に向けて努力するよう激励を受けた。調査目的は、RMP（改訂管理方式）を適用したクロミンククジラの捕獲枠算出のための生物学的及び生態学的

情報の高精度化と、生態系モデルの構築を通じた南極海生態系の構造及び動態の研究である。今次調査では、調査研究部採集調査研究室長の茂越敏弘調査団長の下、クロミンククジラ 333 頭を採集して、2017年3月下旬に帰港する予定である。

当研究所定時評議員会の開催

当研究所の定時評議員会が11月29日に開催され、①平成27年度事業報告、計算書類（案）及びこれらの附属明細書（案）の報告及び承認の件、②平成27年度公益目的支出計画実施報告書の報告の件、及び③定款の一部変更の件について審議され、原案どおり可決された。

日本鯨類研究所関連出版物情報（2016年9月～2016年11月）

[印刷物（研究報告）]

- Ohishi, K., Bando, T., Abe, E., Kawai, Y., Fujise, Y., Maruyama, T. : Long-term and large-scale epidemiology of *Brucella* infection in baleen whales and sperm whales in the western North Pacific and Antarctic Oceans. The Journal of Veterinary Medical Science 78(9). 1457-1464. 2016/10/1.
- Pastene, L. A., Goto, M. : Genetic characterization and population genetic structure of the Antarctic minke whale *Balaenoptera bonaerensis* in the Indo-Pacific region of the Southern Ocean. Fisheries Science 82(6). 873-886. 2016/11.

[印刷物（雑誌新聞・ほか）]

- 当研究所：鯨研通信 471. 32pp. 日本鯨類研究所. 2016/9.
- 西脇茂利：巻頭エッセイ 定置網に混獲されるミンククジラが捕鯨再開を担う！. 季刊鯨組み 13. クジラ食文化を守る会. 1-2. 2016/10/12.
- 大隅清治：国際補鯨委員会 / 科学小委員会の変遷と日本との関係（VI）IDCR/SOWER 南半球産ミンククジラ資源評価航海（その2）. 鯨研通信 471. 1-15. 2016/9.
- 大隅清治：クジラと日本文化の話 3. 鯨飲馬食. 望星 568. 90-91. 2016/9.
- 大隅清治：クジラと日本文化の話 4. 食料危機とクジラ. 望星 569. 92-93. 2016/10.
- 大隅清治：クジラと日本文化の話 5. 恵比寿としてのクジラ. 望星 570. 94-95. 2016/11.
- 大隅清治：クジラ食文化（13）タレ. 季刊鯨組み 13. クジラ食文化を守る会. 4. 2016/10/12.

[学会発表]

- 村瀬弘人、北門利英、田村 力、米崎史郎：An attempt to model marine ecosystem of the Indian sector of the Antarctic using Ecopath (Ecopath を用いた南極海インド洋区における生態系モデリングの試み). 第7回極地科学シンポジウム ポスタープレゼンテーション. 国立極地研究所. 2016/11/29.
- 村瀬弘人、田村 力：鯨類資源調査・研究における電磁波の利用. 電磁界理論研究会. 白浜古賀の井リゾート&スパ. 和歌山. 2016/11/18.
- Sasaki, H., Tamura, T., Hakamada, T., Matsuoka, K., Murase, H. and Kitakado, T. Spatial estimation of

prey consumption by common minke, Bryde's and sei whales in the western North Pacific: A preliminary attempt. PICES W6 Workshop 'Consumption of North Pacific forage species by marine birds and mammals'. San Diego, USA. 2016/11/3.

田村 力：鯨類の食物消費量推定．自由集会“鯨脚類の食物消費量算出に向けて”．平成 28 年度日本哺乳類学会．筑波大学．茨城．2016/9/23.

Tamura, T., Hattori, K. and Goto, Y. Seasonality & decadal changes in marine mammals: -What time of year and what year or decade to target for diets and abundance?-. PICES W6 Workshop 'Consumption of North Pacific forage species by marine birds and mammals'. San Diego, USA. 2016/11/3.

[放送・講演]

松岡耕二：ライントランセクト法．東京海洋大学海洋生物資源学部門ミニワークショップ．東京海洋大学品川キャンパス 8 号館 205 室．東京．2016/9/2.

後藤睦夫：クジラ博士の出張授業．長崎市立西山台小学校．長崎．2016/11/24.

後藤睦夫：クジラ博士の出張授業．長崎市立福田小学校．長崎．2016/11/25.

松岡耕二：クジラ博士の出張授業．太地町立太地小学校．和歌山．2016/11/28.

西脇茂利：「触れる地球」と海の命サイエンス．第 8 回東京国際科学フェスティバル前夜祭．3 × 3 LabFuture. 東京．2016/9/23.

京きな魚（編集後記）

本誌のここ数号にわたって、大隅名誉顧問が IWC 科学小委員会の変遷とそれに対する我々日本の研究者の対応について詳述されてきた。日本が IWC に加盟したのは 1951 年であり、2017 年の現在まで 65 年に及ぶ歴史である。ここでいう日本の研究者とは、鯨類資源の持続的利用を是と考える者を指しており、大学の先生から捕鯨に関わる行政官までも含めた方々である。65 年余の経過の中で、科学小委員会がどのように変貌してきたのか、また、それに合わせて日本の研究者が迷いながらも最善の道を探し、たゆみない努力を続けてきたのか。そのような長きにわたる変遷を掘り起こし、このような記録にまとめたのは、大隅さんでなければできないことであろう。大隅さんは日本が IWC に加盟して科学小委員会に関わるようになった時点から現在まで一貫して研究者グループの中心的な存在であり続けた。私が鯨に関わるようになったのは 20 数年前のことであるが、ただただ山積する目の前の問題に取り組み、それを何とか処理することに追われた日々であった。大隅さんも同じような日々を送ったことであろうが、それで終わることなく、それを今振り返り、記録として残すことに努力された。本当に貴重な資産を残されたことに感謝したい。

（畑中 寛）